



## 待降節第4主日 (ルカ 1:26-38)

マリアの答えが想定を上回っていたので去って行った

人間も還暦が徐々に近づいてくると、非常にずる賢くなるようです。誰かが自分に説明して聞かせているとしましょう。その話の中身を、話している相手よりも数倍詳しく知っているのに、「ほお。そうか。なるほど」と、初めて聞いた話であるかのように聞いたりします。

内心は「誰に向かって話しよう」と思っているのですが、それを顔に出さず、「おお。お前詳しいんだな」と返したりします。話している相手は大満足です。思い返すと中田神父も、30年前には主任神父様に同じように何かを得意になって話していたのかも知れません。

主の降誕がもうそこまで来ています。準備を急ぎましょう。イエスの誕生の予告が、本日の福音朗読箇所です。朗読で目に留まったのは、天使ガブリエルとマリア、ともに「言った」場面が二度ありまして、マリアの語られた言葉が、特に印象的です。

天使ガブリエルが神から託された言葉は、心の清いマリアでさえも、戸惑い、考え込むほどでした。一般的に何かの挨拶は、相手を間違えていない限り、思い当たることであって、「あー、そうなんだな」と受け入れることができるのですが、「いったいこの挨拶は何のことか」(1・29)と感じたのです。

マリアの一回目の「言った」では、天使ガブリエルの二度の「言った」を受けとめるため、マリア自身を完全に解き放ちました。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」(1・34)これは心を閉ざす方向にではなく、何とかして受けとめようと、心を解き放って尋ねた言葉でした。

そして天使ガブリエルが答えます。天使の答えを聞いて、マリアの二度目の「言った」は次の通りです。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(1・38)ご自身をすっかり委ねるマリアの言葉は、天使に託された言葉を包み込むものでした。

マリアの「言った」が十分だったので、天使は満足し、これ以上何も語る必要がないので去って行きました。人間の言葉が、神から託された言葉を包み込むほどであったのは、これが最初で最後だったことでしょう。マリアは二度の「言った」の中で、心を神に向けて完全に解放し、ご自身をすっかり委ねたのです。

これが、私たちに示されたご降誕への最後の準備です。ご降誕は目の前です。私の心を御子の住まいとして、完全に解放しておきましょう。「準備しますから、しばらくお待ちください」ではありません。すぐに泊まっていただけのように、完全に解放しておきましょう。

そして、御子イエスの願いに、自分自身をすっかり委ねましょう。新生児に必要な場所は、静かで温かみのある部屋です。いざとなったら、イエスのとどまる部屋を保つためにこの世の騒がしさから逃れましょう。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。  
「お言葉どおり、この身に成りますように。」神に自分を委ねる決意を  
ささげて、夜半のミサに備えましょう。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。